



予科練適性部の建物。戦後しばらくは、土浦三高の校舎として使用されていました。(上、写真提供：土浦三高)

適性部への取り付け道路。現在は土浦三高生の通学路になっています。道路の南側(左側)にあった防空壕は戦時応急治療所になりました。

(右下、2016年4月撮影)



霞ヶ浦(その18) 6月10日阿見空襲1

阿見村には海軍航空兵養成の一大拠点であった霞ヶ浦海軍航空隊・土浦海軍航空隊(予科練)、航空機・各種兵器・弾薬等の開発・製造・修理・補給を行う海軍直営の軍需工場であった第一海軍航空廠等の軍事施設が集中していました。そのため1944(昭和19)年末から1945年にかけて空襲を受け、特に1945年6月10日の空襲では予科練習生や関係者の、軍民合わせて370名以上が亡くなりました。

本土空襲

1944(昭和19)年6月から7月にかけて、アメリカ軍はマリアナ諸島のサイパン島・テニアン島・グアム島を攻略し、日本本土爆撃のため、3つの島に飛行場建設を開始しました。突貫工事で10月半ばには5つの飛行場が完成、大型爆撃機B29(通称は「超・空の要塞」)による日本本土空襲の態勢が整いました。11月24日、80機からなるB29の大編隊がマリアナ諸島の飛行場を発進し、東京武蔵野の中島飛行工場を爆撃しました。これが本格的な本土空襲の始まりでした。B29による空襲は1945年2月までは、特定の軍事施設を爆撃対象としていましたが、3月10日の東京大空襲以後、名古屋、大阪、神戸、横浜等でも、住民の居住地を目標とした無差別爆撃が続けられ、一般住民も空襲の被害を受けるようになりまし。更に6月以降は硫黄島から発進した戦闘機や艦載機も加わり、地方の中小都市に対しても徹底した焼夷弾爆撃が行われました。茨城県でも阿見をはじめ水戸、日立、勝田等が空襲に見舞われています。『太平洋戦争によるわが国の被害総合報告書』(経済安定本部1949)によれば、終戦までに全国で約150の都市が空襲を受け、広島、長崎の原爆投下による死者を含めて、軍人軍属を除く一般人の死者は約34万人を数えています(ただし、34万人という数には資料によって違いがあります)。

阿見初空襲

海軍航空隊や第一海軍航空廠等の軍事施設(土浦市右俣付近から阿見村にか

けて広大な敷地を有していました。その一部が現在の陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地・関東補給処です)が集中していた阿見村はたびたび空襲に見舞われました。最初の空襲は1944年11月24日でした。午後2時頃、京浜地区に侵入したB29の1機が君原村上空を通過した際に、海軍の木原送信所(美浦村木原地区。現在は跡地の一部に老人福祉センターや運動公園などが造られています)を機銃掃射した流れ弾とみられる曳光弾(弾の飛び方向を確認できるように燃えながら飛ぶ弾)の1発が石川地区の民家の屋根に命中、茅葺き屋根に火が付き火災が発生しました(発見が早かったため被害は最小限に食い止められました)。これが阿見最初の空襲でしたが、この空襲では以後の大規模空襲のための航空写真撮影、攻撃目標の確認等が行われたのではないかとされています。その後、それほど空襲はありませんでしたが、1945年2月に入り、第一海軍航空廠が被害を受けました。2月16日、艦載機グラマンF6Fの編隊が第一海軍航空廠を銃爆撃し、大型機体修理工場・発動機部の防音発動機試運転場等が破壊され、工員10名が戦死しました。5月28日にはP51戦闘機30機の攻撃により、第一海軍航空廠の建物2棟、第一軍需工廠(前中島飛行機株式会社若栗工場、零戦の組み立てが行われていました。現三菱化学)の建物1棟が全焼、民家では全半焼家屋2戸、死者1名、負傷者3名の被害が発生しました。この頃になると、海軍施設が近隣の山野に移転したため、これが攻撃目標となり、付近の住民も被害を受けることになったのです。

6月10日

この日は日曜日とあって、予科練生たちは、一週間の垢を落としてのおんびりできる外出を心待ちにしています。また他県からも多くの面会人が来ていました。特に予備学生と予科練甲種第14期生(前期)とが水上・水中特攻隊員として出発する日を間近に控えて、隊門近くには面会の家族が早朝から集まっています。しかし7時30分頃、「敵機の大編隊が南方洋上を北上中」との情報で隊内第二警戒配備(警戒警報)が発令され、外出は禁止となり、予科練生は避難を余儀なくされました。8時には「敵機が本土接近、伊豆半島から東京方面に進行」との情報で、第一警戒配備(空襲警報)が発令され、8時2分頃には第一波が来襲、霞台の海仁会集会所(現かすみ公民館)、下士官兵集会所(現水戸信用金庫阿見支店)付近や青宿集落の一部、立ノ越集落の一部に爆弾が投下されました。8時4分〜5分頃には第二波が来襲、青宿の鹿島神社の防空壕付近や予科練兵舎・講堂の一部に爆弾を投下しました。更に8時30分〜40分過ぎに第三波・第四波が来襲、航空隊の第二烹炊所ポイラー室から蒸気が奔騰し、同時に、火と黒煙が一面に立ち昇りました。隊内はその火炎と黒煙に覆われ、火災による竜巻も起こってトタン板や角材までもが吹き飛んでくる有様でした。8時50分〜9時頃には第五波が来襲、舟子地区に爆弾が投下されましたが、目標となった木原送信所には被害はありませんでした。以後空襲はなく、9時45分頃によりやく空襲警報が解除されました。

24名、計100名が亡くなりました。

この空襲はグアム島を発進した米空軍314航空隊とテナアン島を発進した58航空隊のB29が68機と空母から発進した戦闘機によって行われ、土浦海軍航空隊(予科練)、舟島格納庫(大型水上飛行艇の格納庫、現防衛庁技術研究所土浦試験場)、大室の海軍気象学校(註1)、木原送信所の4ヶ所が攻撃目標となっていました。阿見町(註2)へは南西方面から侵入し、1,464発の250kg爆弾を約6,000mの高度から投下し、米軍資料には目標物の39.4%を破壊したと記されています。空襲による犠牲者は374名に及びましたが、その内訳は阿見町郷土戦史調査会の調査によれば、予科練生等281名、霞ヶ浦海軍航空隊軍人24名、青宿地区住民7名、立ノ越地区住民11名、廻戸5名、竹来9名、島津16名、美浦村舟子6名、予科練面会人13名、通行人2名となっています。その大半は目標外に投下された爆弾による被害者でした。

土浦海軍航空隊(予科練)では、教官・教員、予科練生その他を含む軍人軍属281名が隊内外で戦死しましたが、その多くが、避難していた防空壕が爆弾の直撃を受けたことにより犠牲となりました。特に被害がひどかったのが青宿の鹿島神社下の防空壕に入った甲種14期生でした。当時鹿島神社の階段両側には予科練の防空壕が数本掘られていましたが、その左側(西側)の防空壕の入口付近に直撃弾2発を受け、その爆発と爆風で防空壕が崩壊し、14期生の多くが生きて埋めとなりました。生き残った同期生が数丁のスcoopで必死の救助を試みましたが、埋没圧死した者76名、直撃弾の被爆、爆死、貫通銃創等で戦死した者

法泉寺門前の慰霊碑



阿見町青宿の鹿島神社。階段の両側に防空壕が掘られており、西側(左側)の防空壕(写真正面の丘状の部分)が直撃弾を受けました。(いずれも2016年4月撮影)

現在の武器学校グラウンドがある第一練兵場は、20発〜30発の250kg爆弾の爆撃で直径4m〜5mの掘り鉢状の穴が無数に空き、通行不能となり、隊外の道路も穴だらけで、土浦方面からの応援消防車も立ち往生してしまいました。鉄筋コンクリート構造であった航空隊司令部3階は壊滅、第五から第八の4個の兵舎、第一から第十三の13個の講堂、柔道場、プール、第一浴場、面会所が焼け落ちてしまいました。土浦航空隊をはじめ周辺地域には手足のない死体が散らばり、凄惨そのもの、空襲前とは様相が一変し、修羅場と化していました。土浦海軍航空隊は人的面、施設面、全てにおいてその機能を失ってしまいました。必勝の信念に燃えて、日々訓練に励んでいた予科練生たちの、兵舎を焼かれ友を失ったその衝撃は大きく、いつもは若者

で活気に満ちていた隊内も、この日ばかりは沈痛な空気に包まれていました。

適性部(註3)(現土浦三高)南側崖下の防空壕には戦時応急治療所が設けられ、各所から続々と死傷者が運び込まれました。隊内の医務科の病舎でも死傷者の治療に追われていましたが、第三波・第四波の空襲で病舎も被弾し、治療に当たっていた隊員も死傷する事態となりました。空襲警報が解除されると、怪我人や死者が次から次へと適性部の建物に運ばれ、適性部の女子職員も看護婦とともに治療の手伝いに追われました。負傷者は応急処置を受けた後、土浦市下高津の霞ヶ浦海軍病院(現国立病院機構霞ヶ浦医療センター)や同市右叡の海軍共済病院(現まりやま団地)に運ばれていきましたが、適性部の一室には遺体が山と積まれていました。予科練生たちは入隊したときから死(特攻)は覚悟していましたが、敵と相まみえることもなく隊内や壕内で戦死した彼らの思いは、「無念」の一語であつたと思います。

翌日には戦死者の遺体を適性部の脇の広場(現土浦三高グラウンド)に運び、大きな穴を掘り、第二練兵場造成工事用のトロツコのレールを渡して、その上にトタン板を敷き、予科練生の遺体を並べ、破壊された建物の木材を重ね、松根油(註4)をかけて茶毘に付しました。その遺骨の一部は各人の白木の箱に納められました。残った膨大な遺骨は傍らの法泉寺の住職の手により寺の墓地に埋葬されました。現在、法泉寺門前の、遺体を茶毘に付した適性部の広場を望む場所に慰霊碑が建てられ、毎年6月10日には元予科練生、空襲体験者や遺族が集

まり、慰霊の法要が執り行われています。

※注1 海軍気象学校
大日本帝国海軍における艦船及び航空機の航路確保のための気象・天候・海洋観測専門の軍人を養成する教育機関。1944年7月1日、海軍航海学校分校として茨城県阿見村(現阿見町曙町一帯)に開校し、1945年3月1日に「海軍気象学校」として独立した。しかし7月15日までに繰り上げ修了・閉校措置がとられ、僅か4ヶ月で閉校となった。終戦直後、茨城師範学校(現茨城大学)男子部が一時移転したが、現在、跡地は住宅地となっている。

※注2 阿見町
阿見村は、1945年5月27日(海軍記念日)を期して、阿見町となった。

※注3 適性部(土浦海軍航空隊適性部)
予科練生の採用試験や採用後に操縦要員と偵察要員とに区分するための各種の検査とこれに必要な研究を実施した。土浦海軍航空隊が発足した1940年11月に設置された。最初は本館横の第一兵舎にあつたが、その後、現在の霞ヶ浦高校付近に移り、さらに1943年頃から現在の土浦三高の地に研究棟の建設が進められ、1945年4月に適性部の大半が移転した。7月20日、研究部門は航空要員研究所として独立し、終戦を迎えた。

※注4 松根油
マツの伐根(切り株)を乾溜することで得られる油状液体。太平洋戦争末期、南方からの原油輸送が困難となって燃料が極度に不足したため、松根油を原料に航空揮発油(ガソリン)を製造した。原料の伐根の発掘やマツの伐採には多大な労力が必要なため、国民が無償労働奉仕に駆り出され、大量の松根粗油が製造された。しかし、最終製品の航空揮発油は僅か500キロリットルしか製造できなかった。

(高21回 松井泰寿)

参考文献

『阿見と予科練』(阿見町 2002刊)

『続・阿見と予科練』(阿見町 2011刊)

『6月10日魔の90分(1)〜(11)』

(常陽新聞に連載2003)屋口正一(高1回)